

# 「おとふけ」の 伝承

私たちのふるさと「おとふけ」。先人たちの労苦があり、いま、私たちの住む「おとふけ」がある。広報おとふけでは、音更町に根をおろし、ふるさとを築いてきた人たちの後世に語り継ぎたいお話しを紹介しています。



熊谷 昭さん

昭和4年7月24日生まれ。  
西中音更在住

## 熊谷家のはじまり

**私**の父は男4人、女1人の兄弟姉妹の中、4男

として山形県で生まれました。家を継いだ3男の急死後、大正5年に、長兄が長沼町に所有する17町歩の土地の管理を任されることになり、北海道に渡りました。

当時は水田化の波で、値上がりした土地の売却益を元手に、大正10年、父は100町歩の農地を持つことを夢見て鹿追町に入植。その後、所有地を広げていきますが、戦後の農地解放により父の夢は破れます。

この間、先妻をスペイン風邪で亡くす悲しい出来事がありました。その後再婚し、昭和4年に私が生まれました。

## 拓殖鉄道と 戦後の記憶

**私**たちが子どものころには、拓殖鉄道が開通し、

東瓜幕から鹿追への往来の生活が始まりました。

「鹿追開拓の原点は、柏の木を伐採して鉄道の枕木にしたことだ」と、よく父は語っていたものです。

私は異母兄弟も含め12人兄弟で育ちました。戦争で兄たちを失い、私も十勝農学校在学中に入隊を志願しましたが、幸い終戦を迎え、「生活あつての学問」との父の勧めもあり、2年生のときに退学してこの地で農業を継ぎました。

戦後は食糧欠乏の時代。その頃、わが家は小さなでんぷん工場を営んでいましたので、でんぷんを求め中瓜幕の停留所から連日20〜30人の人たちが列をなして来たものです。でんぷんと言っても、最初に取れる純白で質の良いものではなく、水が滴る茶色がかつた不純物を含むもの（二番粉でんぷん）でした。中にはお金もなく一張羅の着物を

持つてくる人もあり、その惨状は思い出しても涙が出るような時代でした。

## 機械化の先駆け

**私**と30年、鹿追町農協から音更町農協へ移りました。

その頃は馬で耕し手で刈る畜耕手刈り農法でしたが、

能率的な農業をしたいと思い、昭和36年、友人と共同でトラクターを購入。昭和46年には補助事業を利用して音更町第一号となる刈り幅9尺程の小麦用コンバインを購入しました。

現代のそれと比べると小さなものでしたが、木野農協の地域まで出向き86町歩を刈るなど、機械化の先駆けとなりました。

## 西中地域の強い絆

**西**中は、昭和になってから同時期に入植した者

同士が集まるため、昔から「ちよつと味噌を貸して」と言い合える、人と人が強い絆で結ばれた地域です。老人クラブ会長の提案で始まった西中音更芸能の集いは、地域全体から老若男女が集るイベ



西中音更芸能の集いの様子

ントとして今日も続いています。

また、納涼夏まつりも毎年行われ、地域活性化には大事な行事になっていきます。

## 農業に寄せる願い

**私**は常々、農業には三つの革命があったと言っ

ています。一つは機械化、二つは除草剤、三つはビニールです。これによって私たちは四季を問わずさまざまな食物を得ることが可能になりました。人間が生きていくために欠かす事ができないものは食糧でそれを支えるのが農業です。自分の職業に誇りを持って、この農業を守っていく後継者が多く育ってくれることを願ってやみません。